

安達が原

楠山正雄

青空文庫

むかし、京都きょうとから諸国しよこく修行しゆぎように出た坊さんぼうさんが、白河しらかわの関せき
 を越えて奥州おうしゆうに入りました。磐城国いわきのくにの福島ふくしまに近い安達あだちが
 原はらという原はらにかかりますと、短い秋みじかあきの日がとつぷり暮くれました。
 坊さんぼうさんは一日いちにち寂しい道みちを歩きつづけに歩いて、おなかはすくし、
 のどは渇かわくし、何なによりも足あしがくたびれきつて、この先さき歩きたくも
 歩あるかれなくなりました。どこぞに百姓家ひやくしやうやでも見みつけ次第しだい、頼たの
 んで一晩ひとばんと泊とめてもらおうと思おもいましたが、折おりあしく原はらの中なかにか
 かって、見渡みわたす限りかぎぼうぼうと草くさばかり生おい茂しげった秋あきの野末のすえのけ

しきで、それらしい煙けむりの上あがる家うちも見えませぬ。もうどうしようか、いつそ野宿のじゆくときめようか、それにしてもこうおなががすいてはやりきれない、せめて水みずでも飲のましてくれる家うちはないかしらと、心こころ細ほそく思おもいつづけながら、とぼとぼ歩あるいて行きますと、ふと向むこうにちらりと明あかりが一つ見みえました。

「やれやれ、有あり難がたい、これで助たすかった。」と思おもつて、一生いっしょう懸命けんめい明あかりを目め当てにたどつて行きますと、なるほど家うちがあるにはありましたが、これはまたひどい野中のなかの一つ家やで、軒のきはくずれ、柱はしらはかたむいて、家うちというのも名なばかりのひどいあばら家やでしたから、坊ぼうさんは二度どびつくりして、さすがにすぐとは中はへ入はいりかねていました。

すると中では、かすかな破れ行灯の火かげで、一人のおばあさんがしきりと糸を繰っている様子でしたが、その時障子の破れからやせた顔を出して、

「もしもし、お坊さま、そこに何をしておいでだえ。」

と声をかけました。

出し抜けに呼びかけられたので、坊さんは思わずよつとしながら、

「ああ、おばあさん。じつはこの原の中で日が暮れたので、泊る家がなくなつて困っている者です。今夜一晩どうかして泊めては頂きますまいか。」

といいました。

するとおばあさんは、

「おやおや、それはお困りこまだろう。だがごらんのとおりに原中はらなかの一軒家けんやで、せつかくお泊めと申もうしても、着きてねる布団ふとん一枚まいもありませんよ。」

とことわりました。

坊さんぼうはおばあさんがそういう様子ようすの親切しんせつそうなのに、やつと安心あんしんして、

「いえいえ、雨露あめつゆさえしのげばけっこうです。布団ふとんなんぞの心配しんぱいはいりませんから、どうぞお泊めとなすつて下さいくだ。」

と頼たのみました。

おばあさんはにこにこ笑わらいながら、

「まあまあ、そういうわけなら、御不自由でも今夜は家に上がつてゆつくり休んでおいでなさい。」

といつて、坊さんを上へ上げてくれました。

坊さんは度々お礼をいいながら、わらじをぬいで上へ上がり

ました。おばあさんは、囲炉裏にまきをくべて、暖かくしてくれ

たり、おかゆを炊いてお夕飯を食べさせてくれたり、いろいろ

親切にもてなしてくれました。それで坊さんも、見かけによら

ないこれはいい家に泊り合わせたと、すっかり安心して、くり

返しくり返しおばあさんにお礼をいつていました。

お夕飯がすむと、坊さんは炉端に座つて、たき火にあたりな

がら、いろいろ旅の話をしますと、おばあさんはいちいちうなず

いて聞きながら、せつせと糸車いとぐるま まわを回していました。そのうちだんだん夜が更けるに従って、たださえあばら家のことですから、外の冷たい風が遠慮なく方々から入り込んで、しんしんと夜寒が身にしみます。けれどあいにくなことには、炉の方の火がだんだん心細くなつて、ありつたけのまきはどうに燃やしつくしてしまいました。

おばあさんはふと坊さんの寒そうにふるえているのを見つけて、「おやおや、まきがみんなになりましたか。お客さまがあると知つたらもつとたくさん取っておけばよかったものを、気のつかないことをしました。どれどれ、ちよつと裏の山へ行つてまきを取つて来ますから、お坊さま、しばらく退屈でもお留守番をお頼

み申しもうします。」

こういっておばあさんは氣き輕がるに出て行こうとしました。

すると坊ぼうさんはたいそう氣きの毒どくがつて、

「いやいや、この夜更よふけにそんな御苦勞ごくろうをかけてはすみません。

何なんならわたしが一ひと走はしり行いつて取とつて来きましょう。」

といいますと、おばあさんは手をふつて、

「どうして、とんでもない。旅たびの人ひとに分わかるものではない。まあ

まあ、何なんにもごちそうのない一つ家やのことだから、せめてたき火び

でもごちそうのうちだと思おもつてもらいましよう。」

といいいい出でかけて行いきましたが、何なんと思おもつたのか戻もどつて来きて、

「その代かわりお坊ぼうさま、しつかり頼たのんでおきますがね、わたしが

帰^{かえ}つてくるまで、あなたはそこにじつと座^{すわ}っていて、どこへも動^{うご}かないで下^{くだ}さいよ。うっかり動^{うご}いて、次^{つぎ}の間^まをのぞいたりなんぞしてはいけませんよ。」

とくり返^{かえ}し、くり返^{かえ}し、念^{ねん}を押^おしました。

「どういうわけだか知^しらないが、むろん用^{よう}もないのに、人^{ひと}の家^{うち}の中^ななんぞをかつてにのぞいたりなんぞしませんから、安^{あん}心^{しん}して下^{くだ}さい。」

と坊^{ぼう}さんもしいました。

それでおばあさんも安^{あん}心^{しん}したらしく、そのまま出ていきまし
た。

さておばあさんが出て行つてしまふと、坊^{ぼう}さんはただ一人^{ひとり}、し
 ばらくはつくねんと炉^ろ端^{ばた}に座^{すわ}つたままおばあさんの帰^{かえ}りを待^まつて
 いましたが、じき歸^{かえ}ると思^{おも}つたおばあさんはなかなか歸^{かえ}つて来^きま
 せん。何^{なに}しろ西^{にし}も東^{ひがし}も分^わからない原^{はら}中^{なか}の一軒^{けん}家^やに一人^{ひとり}ぼつちと
 残^{のこ}されたのですから、心^{こころ}細^{ほそ}さも心^{こころ}細^{ほそ}いし、だんだん心^し
 配^{んぱい}になつてきました。何^{なん}でも安^あ達^{だち}が原^{はら}の黒^{くろ}塚^{づか}には鬼^{おに}が住^すんで
 いて人^{ひと}を取^とつて食^くうそうだなどという、旅^{たび}の間^{あいだ}にふと小^こ耳^{みみ}にはさ
 んだうわさを急^{きゆう}に思^{おも}ひ出^だすと、体^{からだ}中^{ぢゆう}の毛^け穴^{あな}がぞつと一時^じに立^た
 つように思^{おも}ひました。そういえばこんな寂^{さび}しい原^{はら}中^{なか}におばあさ

んが一人住んでいるというのもおかしいし、さつき出がけに、妙なことをいって度々念を押して行つたが、もしやこの家が鬼のすみかなのではないかしらん。いったい「見るな。」といった次の間には何があるのか知らん。こう思うと、こわさはこわいし、気にはなるし、だんだんじつとして辛抱していられなくなりました。それでもあれほど固く「見るな。」といわれたものを見ては、なおさらどんな災難があるかもしれません。

坊さんはしばらく見ようか、見まいか、立ったり座ったり迷つていましたが、おばあさんはやっぱり帰つて来ないので、とうとう思いきつて、そつと立つて行つて、次の間のふすまをあけました。

すると坊さんぼうさんは驚おどろいたの、驚おどろかないのではありません。あけるといつしよに中からぷんと血ちなまぐさいにおいが立たつて、人間にんげんの死骸しがいらしいものが天てんじよう井いまで高く積つみ重かさねてありました。そしてくずれてどろどろになった肉にくが血ちといつしよに流ながれ出だしていました。

坊さんぼうさんは「あつ。」といったなり、しばらく腰こしを抜ぬかして目ばかり白しろくろ黒くろさせたまま起おき上あがることもできませんでした。そのうちふと氣きがつくと、これこそ話はなしにきいた一つ家やの鬼おにだ、ぐずぐずしているとんでもないことになると思おもつて、あわててわらじのひもを結むすぶひまもなく逃にげ出だそうとしました。けれども今いまにもうしろから鬼おに婆ばあに襟えりくび首くびをつかまれそんな氣きがして、氣きばか

りわくわくして、腰こしがわなわなふるえるので、足あしが一向いつこうに進すすみません。それでもころんだり、起おきたり、めくらめつぽうに原はらの中を駆かけ出だして行きますと、ものの五六町ちようも行かないうちに、暗くらやみの中で、

「おうい、おうい。」

と呼よぶ声こえがしました。

その声こえを聞きくと、坊ぼうさんは、さてこそ鬼おに婆ばあが追おっかけて来きたとがたがたふるえながら、耳みみをふさいでどんだん駆かけ出だして行きました。そして心こころの中で悪鬼除あくきよけの呪文じゆもんを一いつし生懸命しょうけんめい唱となえていました。そのうち、

「おうい待まて、おうい待まて。」

と呼ぶ鬼婆おにばあの声こえがずんずんちか近くなつて、やがておこつた声こえで、

「やい、坊主めぼうず、あれほど見るなといった部屋へやをなぜ見たのだ。逃げたつて逃にがしはしないぞ。」

というのが、手てにとるように聞きこえるので、坊さんぼうはもういよいよ絶ぜつ体たい絶ぜつ命めいとかくぜつめいごをきめて、一心いつしんにお経きやうを唱となえながら、走はしれるだけ走はしつて行きました。

すると、お経きやうの功徳くどくでしょうか、もうそろそろ夜よが明あけかかつてきたので、鬼おにもこわくなつたのでしょうか、鬼おにの足あしがだんだんのろくなつて、もうよほど間あいだが遠とおくなりました。そのうちずんずん空そらは明あかるくなつてきて、東ひがしの空そらが薄うす赤あかく染そまつてくると、ど

こかの村でむらにわとりな鶏の鳴き立てる声こえがいさましく聞きこえました。

もう夜よが明あけてしまえばしめたものです。鬼おには真昼まひるの光ひかりにあつ

てはいくじのないものですから、うらめしそうに、しばらくは、

旅僧たびそうのうしろ姿すがたを遠くからながめていましたが、ふいと姿すがたが消き

えて見えなくなりました。

坊さんぼうさんはそのうち人里ひとさとに出て、ほつと一息ひといきつきました。そ

して花はなやかにさし昇のぼった朝日あさひに向むかつて手を合あわせました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

安達が原

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>